

湧き水と共に生きる

北海道名寄産業高等学校
酪農科学科 3年 横山 大地

私の実家は酪農業を営んでいます。私の住んでいる北海道の幌延町は、酪農業が盛んな地域です。自然に恵まれた土地を有効に活用し、放牧の時には、湧き水を放牧地に引き込み、牛の飲み水として使用しています。放牧している圃場は、木々に囲まれた広大な土地であり、ほぼ、自然な状態で放牧を行っています。牛がストレスを感じないように配慮した経営を、父は考え今日まで行ってきました。しかし、私が幼いときの酪農と大きく違う点が2つあります。1つ目は、1頭あたりの乳量です。1頭あたりの年間乳量は約1,000kg増加しました。2つ目は牛の頭数も約60頭から70頭に増加しています。

日本の牛乳の生産能力はアメリカやカナダに並んで非常に高いのですが、一つ大きな疑問があります。いったい、この圃場に牛を何頭まで飼育する事ができるのだろうか、家で栽培している牧草やデントコーンは、何頭までの飼育に耐え得るのだろうか、いつかは、飼育頭数の限界が来ます。幌延町では、百頭未満の牛舎が数多くあり、自給飼料を中心とした経営を行っているところがほとんどです。

これから、もし、あらゆる農作物や畜産物が輸入自由化されれば、外国の農作物と値段では勝負できないと感じています。そうすると、後は品質で勝負していかなければいけません。その為には健康な牛を生産する。良質な牧草を栽培する。安全な土壌を作るという基本を守らなければ、品質でも勝負できないと感じています。牛は草を食べて生きていく動物です。本当は濃厚飼料を与えなくても育つはずですが、しかし、私たちが牛1頭からより、たくさんの牛乳を搾り出すために、牛を改良した結果、牧草のみでの飼育は困難になりました。その為に、飼料を外国から購入し、その飼料を牛に与え、その後、堆肥となって土地に排出されます。その結果、土壌で分解出来ない量の堆肥が牧草地に排出されます。直接的ではありませんが、牛の堆肥を輸入していることになります。このまま、堆肥の散布量が増え、大事な湧き水を汚染してしまったら牛の飲み水として使用できなくなってしまいます。経済的にも大きな打撃であり、地域の信用も失ってしまいます。しかし、このままこの土地で酪農を行っていく限り、いつかその日が来ることは間違いのないことです。私の父もそれを理解しているため、農薬や購入飼料は極力抑えて酪農を続けてきました。しかし、私たちの生活の事も当然考えなければいけないため、この自然を少しずつ犠牲にしながら私たちを守ってくれました。

そこで私は、父が大切にしてきたこの湧き水を守るために、いえ、この湧き水が10年前の美しさに戻していけるように、将来、環境保全型酪農を意識していきたいと考えています。今までの流れを変えることは、相当な労力と決断力が必要になっていくことは、容易に

想像できます。時代の流れに逆らう経営だということも理解しています。しかし、この湧き水と共存していくことが将来、安定した酪農を行うために必要だと強く感じています。当然、粗飼料主体で飼育していくことになります。今の牛は、昔の牛と比較すると非常に大きく、1頭あたりの乳量も増加しています。その為、生命を維持し生産を行っていくためには、牛の体長を小さくする必要があります。

現在、私は課題研究の授業内で行われている、プロジェクト学習において自給飼料のみの給与で、経営ができるのかをテーマに研究を行っています。学校で生産したチモシーとルーサンを混合させたサイレージを小型の牛に与え実験を行っています。小型の牛で経営していけば、1頭あたりの乳量は減少しますが排出される堆肥の量も少なくなります。さらに、自給飼料だけを与えてできた堆肥は、不純物も少ないため、土壌にも良いのではないかと考えます。そのおかげで、化学物質の少ない牧草をつくることが出来ます。この牧草を食べる牛は当然のことながら健康的な牛になり、安全な牛乳を搾れると思います。外国産の飼料に頼るといことは、どのような農薬を使用されているか分からない状況であり、輸入時に害虫やカビを防ぐためのポストハーベストの心配も無くなります。私は、北海道名寄産業高校を卒業後、北海道立農業大学校への進学に向けて、受験勉強を行っています。酪農技術の習得や資格を取得することは、もちろんのことですが、経営分析の手法なども深く学んでいきたいと考えています。今の酪農は質より量を重視した方が経営的にも有利です。しかし、それと引き替えに今まで地域の自然環境を壊してきたのも事実です。これからの酪農は、製品としての安全はもちろんのこと、健康な牛乳を搾るために、健康な牛を作り、健康な土を作り、安全で地域環境にも配慮した酪農を行っていかなければいけません。これらのことが、全てできて初めて付加価値の高い、環境に配慮した牛乳を生産できると考えます。私の考える酪農は、時代の流れと逆行しています。

今、酪農家にとってTPP問題は、非常に大きな問題だと感じています。今すぐ海外の安い農作物や乳製品が輸入されてきたら、経営が難しくなるという見方は私も変わりません。しかし、このままどうしようかと手をこまねいていても、結局、解決の糸口は見つかりません。ここは、思い切って経営の見方を変えていく必要があると思います。海外の製品が輸入されることだけに、目を奪われがちですが、逆に輸出も行いやすくなります。しかし、今の日本の酪農環境では原料乳の価格が海外と比較して高すぎるため、輸出は難しいという考えが多いのではないのでしょうか。私の父もその1人です。しかし、世界の人口は増え続けています。今、日本は食料をいつでも輸入できるという、幻想に浸っている最中だと私は思います。これから先、食料を輸入できる保証はどこにもありません。世界の国々も、自国の食糧確保に精一杯の世の中に変わっていくような気がします。

日本の牛乳の品質は、体細胞数や細菌数はもちろんですが、乳脂肪率を非常に意識して

いるように思います。私も品質の良い牛乳の条件とは、乳脂率が高いことは必須条件だと考えていました。そのため、飼料給与の方法を考え、優秀な精液を使用し努力を重ねてきました。しかし、その結果、生乳の生産コストも高くなっています。普通に飼育していれば、夏の牛乳は乳脂肪率は下がります。逆に冬は上がります。このように、1年間の中で乳成分が大きく変わることは当たり前です。それが自然だと思います。また、牧草をたくさん食べて育った牛の乳は非常に黄色みを帯びた色をしています。これが、本当の牛乳の色だと思います。つまり、もう一度原点を見つめ直した酪農が逆に付加価値につながり、また、経営コスト削減につながるのではないかと考えます。将来は、インターネット販売を活用し海外にも目を向け、どのような製品が求められているのか調査し、乳製品を輸出できるような酪農家を目指していきたいと思います。その夢も、この新鮮な湧き水があつての未来だと私は考えています。将来は、この自然環境の保全を大前提とし、本当の牛乳を地域に広め、付加価値を高め、環境に配慮した酪農家として、生き残りをかけていきたいと思います。
